

筑波大学が持つ教育資源について

小笠原正明

特任教授

はじめに

昨年4月から、新設の教育企画室の一員となり、筑波大学の教育改革の議論に参加しています。以前から筑波大学には関心があり、仕事の関係で筑波大学の諸先生と浅からぬつきあいがありましたが、外から突然やってきたことには変わりがなく、それぞれの問題の背後にある事情にうといことは言うまでもありません。しかし、そのことをむしろ自分の長所と考え、外部からの視点を提供するつもりで、できるだけ率直に意見を述べるようにしています。

本号の特集では、国立大学の法人化に対する意見が求められています。法人というと、設立の目的の次に、まず「基本財産」を思い浮かべ、次にキャッシュ・フローや中期計画のことを連想します。しろうと考えでは、法人化の問題とは要するに基本財産をいかに運用して設立目的を達成するかという問題に尽きると思います。貸借対照表

に書かれているような意味での基本財産に関する知識は皆無で、何の意見もありませんが、教育企画室がいま集中的に議論している学士課程教育の「筑波スタンダード」に関して、筑波大学が豊富に持つ「教育資源」の内容については興味があります。

財産としての教育システム

教育企画室に赴任して最初の日に、室長の岡本健一先生から開講科目一覧をいただいて目を通しました。学士課程の全開講科目が一冊にまとめられており、科目区分が整然となされ、すべての授業科目にグレードや専門を区別するコード番号がうたれています。学群や学類の壁を感じさせない文字通りの「学士課程教育プログラム」でした。ちなみに、昨年3月まで在職していた北海道大学で同じように全学部・学科の開講科目を要旨も含めて網羅しようとしたら、電話帳くらいの厚さにして上下2巻で収ま

るかどうか、というくらいの量になります。全学共通のコード番号なども、もちろん整備されていません。情報はある量を越えると情報でなくなると言いますから、情報としての学士課程教育プログラムを学生に提供していないということになります。他の総合大学でも事情は似たりよったりでしょう。

筑波大学創設の頃の履修表は今よりももっとシンプルで、入学者全員が履修する語学、体育、国語など共通課程の授業科目（コアカリキュラム）と、各分野が提供する専門科目の2種類しかなく、専攻以外の専門課程の授業科目を選択して合格すると、教養科目として卒業要件単位に加算される仕組みになっていました。学群の学生は、所属にかかわらずどの分野についても自分自身で計画を立てて体系的に学ぶことができました。このような整理された教育プログラムが提供できたのは、筑波大学が創設の時に教育組織と教員組織とを分けたからだ、と言われていました。この教育システムは他にはない貴重な財産だと思うので、その精神とともに維持し、今後とも効果的に運用すべきだと思います。

ただし、この教育システムも現在では見かけほど有効に機能しなくなっているのは残念です。学類ごとに閉じようとする「学類完結主義」が強まって、同じ学群でも他

の学類のカリキュラムを体系的に履修することは今では難しくなっていると聞いています。学士課程としての総合的なプログラムを維持しようとしたら、専門基礎的な部分の共通化、標準化と合わせて、クラスサイズの柔軟化をはからなければなりません。いずれもわが国の大学が共通して求められている課題なので、筑波大学の先進性をここで発揮したいものだと考えています。

学士課程のための教育資源

東京からつくばに通いながら、つくづく筑波大学の学生は恵まれた環境で生活していると思います。大学が町であると同時に町が大学であり、学生の生活空間がまるごとキャンパスに取り込まれています。ケンブリッジの町やミシガン大学のあるアナーバーの町を思い出します。

ご存知のようにケンブリッジやアナーバーは、リベラルアーツを中心とするカレッジを起源としています。カレッジ生活の特長はその中に住んで学業に専念できることと、正課と課外活動の両面でアーツ（芸術）やスポーツに親しむことができることにあります。国立大学法人に関するかぎり、日本の大学の中でアーツ（芸術）とスポーツの両方の学部を備えているところはありません。筑波大学は総合大学でありながら、「リベラルアーツを中心とするアン

ダーグラデュエート教育（学士課程教育）」が可能な珍しい大学の一つです。

ただし、現実はなかなか厳しいということも承知しています。芸術専門学群も体育専門学群もリベラルアーツ教育の意識は希薄で、むしろ高度に専門化した人材を育てようとしているようです。それぞれの分野で競争的環境にあり、適者生存のためにはそうせざるを得ないのですが、芸術や体育分野の存在感を高める戦略の一つとして、非専門の学士課程教育に目を向けていただきたいと思います。筑波大学において組織的に芸術愛好家やスポーツ愛好家を育てることは、高度の専門職業人を育てることと同じくらいの意義があります。そのような教育を受けた筑波大学の卒業生は、全員とは言いませんが、いずれは芸術やスポーツの熱心な支援者に成長するでしょう。このことは、他のすべての学群についても言えることです。

伝統をどう考えるか？

筑波大学に来て奇妙に思ったのは、前身校であり立派な歴史と伝統を持つ東京高師、東京文理大、東京高等体育学校等への言及が少ないことです。何かと言えば、クラーク先生の札幌農学校の話が出てくる北海道大学とは大違いです。筑波大学の創設にあたっては激しい内部対立や文部省との軋轢、

さらに過激な学生運動の介入などさまざまな政治的問題があったようですが、そうしたとしても、筑波大学の前史を無視したり、腫れ物にさわるように扱ったりするのは不自然です。とりわけ長い歴史を持つ東京高師の役割について、きちんとした説明がなされていないのはおかしいと思います。与えられた時代の枠組みと制約の中で、わが国の近代化のために奮闘した偉大な学校について、その積極的な側面をきちん整理した上で大学史として学生に伝えるべきだと思います。

大学の伝統は、重要な教育インフラの一つだと思います。学生の関心はともすれば平面的に拡散し、縦の関係については偏差値の序列ぐらいにしか意識が向きませんが、大学の歴史を伝えることによって学生に自分の歴史的、時間的な位置を自覚させることが可能です。人から人に、古い世代から新しい世代に、伝えるべき何ものかを持たせることは教育の重要な役目です。

大学の伝統を知ることは、大学が一つの「共同体」であることを意識する良い機会にもなります。ともすれば、自己の内面へ内面へと向かい、あるいは自己充足し、あるいは自己否定して外部とのコミュニケーションを失いがちな若者を、積極的に社会や学問や文化の活動に参加させることが大学の重要な役目です。大学が持つ知的共同

体としての性格は、そのためにも必要なものです。大学の伝統は、ごく自然に日常生活を通じて、学生を大学になじませていく力を持っています。

筑波大学への期待

最後になりましたが、筑波大学の建学の精神である「学際性」について私見を述べさせていただきますと思います。学際性の理念は、高等教育においてしばしば過剰に存在する専門主義に対抗するために掲げられたものだと理解しています。先に述べたように、筑波大学の初期のカリキュラムは、複数の専門を持ち得るように設計されました。学士課程教育における学際性とは、筑波大学の履修システムそのものだと私は考えています。

学際性を狭く定義すると、複数分野を融合させた授業を多く揃えなければならないということになります。しかしこれは、学士課程レベルではなかなかうまく行きません。例えば「考古物理化学」という典型的な学際的分野がありますが、学生が学士課程において、考古物理化学という融合的な授業科目を多く履修することには賛成できません。むしろ考古学または物理化学を体系的に学んだ方が、将来、学際性を発揮できるようになります。考古学と物理化学では基礎となる知識や方法論が違いすぎて、

その中間で訓練されるとどっちつかずで役に立たない場合が多いからです。一方、きちんと化学を専攻している学生が考古学をそれなりに体系的に学ぶこと（あるいはその逆のことをすること）は大いに推奨されるべきで、筑波大学はもともとそれが可能なように設計されています。

この広い意味での教育の学際性は、今後ますます重要になると思います。設置基準の大綱化や大学院重点化を経て、筑波大学はかなり複雑な教育組織と教員組織を持つようになり、建学の理念があいまいになりつつあります。法人化を機会に、もう一度筑波大学の教育資源を見直して、学生にとってより分かりやすい魅力的な教育システムを作り上げていきたいと考えています。
(おがさわら まさあき／高等教育学、化学)